

---

# **ポケモン不思議のダンジョン 理想の搜索隊**

ムウマージ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 理想の捜索隊

### 【Zコード】

N7159X

### 【作者名】

ムウマージ

### 【あらすじ】

星の衝突をまのがれで、さらに時の停止騒動も收まり、世界は真の平和が訪れたと思われていた  
だが・・・そんな中、この世界に更なる危機に直面する・・・  
それは、ほんの一つの出会いから・・・

もつと、このストーリー次回作みたいのでおく？

とかいう流れでオリジナルストーリー！

なんて思ったポケモン不思議のダンジョン 星の救助隊の続編！

## プロローグ（前書き）

はあ～い！ムウマージです！  
勢いで新小説投稿！

今回はD.P.シリーズ？違つた、B.W.シリーズだ！

という話

それではどうぞ！

## プロローグ

ポケモン不思議のダンジョン 理想の搜索隊 プロローグ

雷が鳴り響く嵐の空

「はあ・・・はあ・・・」

「もつと・・・もつと早く!」

嵐の中を飛ぶ一ぴき、その背中に乗ついる一人

『わかつてゐる・・・わかつてゐるよー!』

カツ

雷が落ちる

『ああつ!』

雷が一匹の翼をかする

「わつ!」

雷が翼にあたり、バランスを崩したせいで。背中に乗つてゐる人が落ちかかる

ガシツ

落ちかけた所を一匹がギリギリ、手を掴む

『ぐつ・・・』

「・・・・・離して・」のままじゃあなたも落ちつかない・」

『だめだよーそんな・・・・・』

「あなただつたらきっとあれを見つけられるはず・・・・私は大丈夫だからー離してー」

カツ！

大きな雷が落ちる

『「わああああああーーー』

「あやあああああーーー」

一匹と一人が離ればなれに墜ちて行く・・・

山の草原

嵐は過ぎ去り、雲一つないまつたら空

そんな中、山にある草原に一匹のポケモンが倒れていた

『う・・・・』は・・・?

『私・・・生きてるの?』

『うつ・・・・駄目だ・・・・意識が薄れて・・・・』

『フライゴン・・・後はたのんだ・・・・よ・・・・』

『・・・・』

そう言いつと一匹のポケモンは気を失った

## プロローグ（後書き）

シェーイ！ プロローグ 完！  
次回ゆつくりしていってね！

## 第一話 山の草原で（前書き）

「、イ。（。。）」トキマシタ  
ソレテハドウゾ

## 第1話 山の草原で

第1話 山の草原で

山の中腹 居住区

ここはポケモン達が住む山の中腹にあるポケモン居住区

そこには「丘のミジュマル

「わあーー綺麗な虹ーー！」

空を見上げながら言いつ

「・・・あれ？なんだろう・・・？」

首を休めようと下を向いた時、ふと、崖下の草原に草と別な物があるのが見えた

それを凝視する

「あつ！？ポケモンが倒れてるーー？」

それがポケモンだとわかり、すぐさま、そのポケモンの元へと走つていった

山の中腹 山の草原

タツタツタツ・・・

倒れていたポケモンの近くに駆け寄る

「ねえ！大丈夫！？ねえ！ねえつてば！」

倒れているポケモンを揺らす

「う・・・う・・・ん？」

倒れていたポケモンが目を覚ました

「よかつたあ・・・ねえ、大丈夫？」  
ツタージャに呼びかける

「え・・・うん・・・ん！？」

それを聞いて、返したあと、驚きの声を漏らした

「？どうかしたの？」

「あ・・・あれ？おかしいな・・・？」

「なんで・・・なんでミジュマルが喋ってるの・・・！？」

・・・

「え？なんでつて・・・あなたもでしょ？ツタージャ」

「え・・・？わ、私はツタージャなんかじゃないわよ！私は人よ！」

田の前に立つツタージャの言葉に困惑する

「ええー？で、でも、どうからどう見たって、ツタージャだよー。」

「そんな訳・・・」

ツタージャが自分の手を見て、硬直した

「え・・・？」

ツタージャが手から滑るように体に田をやった

「な、な、な、な、なにこれえー？」

「嘘でしょー？なんで私ツタージャになつたくなつてるのー？」

「だ、大丈夫？」

「大丈夫な訳ないわよーーー！」

「と、とにかく落ち着いてー冷静に考えよー！」

ツタージャを落ち着かせようとある

「う・うん・・・」

ツタージャが落ち着いてくれた

「それで・・・あなたはどうしてツタージャになつたか分かる？」

「わかつてたら、こんなに騒がないよ……」

「さうだよね……」

正論である

「それ」「……」

「それに?」

「なんとかわかんないけど、人間だった時の記憶とかほぼ覚えてないの……」

「覚えてない……?」

「うん……あ、でも、一つだけ覚えてる事があるの……」

「一つだけ……？それって……何？」

「名前……私の名前……」

「どんな名前なの?」

「えっと……リン……」

「リン……ていうんだ……」

リン……それが目の前にいるシスター・ジヤの名前なのだろう

「うん……」

「けど……人間がポケモンになるなんて……ありえるのかな……」

「それって、私の話、信じてないって事！？』

「ち、違うよ！』の話は信じてるよ？』

「でも、何が起きたら、人間がポケモンになるんだろうって……」

「……」

ツタージャが首を下ろす

「『ごめん、なんかひどい事言つたかな……？』

そつ子の自分の言葉がいけなかつたのだらうと思いつ、謝る

「ち、違つよ……ただ、これからひどいことをして思つてね……」

「……」

ポトッ

ミジコマルが持つてゐる眼から何かが落ちて、転がる

「あ、待つて！」

ミジコマルはそれを追つていった

「ジユマルが落とした物は地面に空いていた穴に落ちていった

「あ～！」「

「どうがしたの？」

「わ、私の宝物が・・・落ちちゃつたの・・・」

六  
•  
•  
•  
?

リンがミジュマルの近くに寄る

—・・・この穴に?』

- · · ·

- 1 -

リンがその穴を覗き込む

……大分深そ二ね……」

一緒に取りに行つてあけようか?」

「え！？ ほ、ほんと！？」

うん、一応助けてもらつたし・・・

「あ、ありがとう・・・！」

「別に良いって、あのさ、なんかロープみたいのない?」

「ロープ? わかった、取つてくる」

そつとつと//ジユマルは自分の家へと走つていった

タツタツタツ・・・

「おーい! 取つてきたよー!」

ロープを持つて、ミジュマルがツタージャと会流した

「はー!」

「あつがとう!」

ミジュマルからロープを受け取つたツタージャが礼を言つ

受け取つたロープを近くにあつた木に縛りつけ、もう一方の方の六  
へと降ろした

「といひでや、落とした物つて何?」

「えつとね、丸くて、小さいんだけど、赤い色をしてるの」

「赤い色ね・・・

「わかつた、降りましょー!」

「うんー。」

一匹がロープをつたって、穴に降りていく事にした

## 第1話 山の草原で（後書き）

「、イ。（。。）／カン、テス  
ジカイモユックリマツテテネ！」

## 第2話 ダンジョンへ（前書き）

大変お待たせしました  
理想の搜索隊、第2話完成しました  
それではどうぞ！

## 第2話 ダンジョンへ

第2話 ダンジョンへ

崖の洞窟

リン達は、ミジコマルの宝物を探すために、洞穴の一一番下まで降りてきた

そして、リン達が、洞穴の探索を初めてからしばらくして・・・

「なんなの・・・」のあつえないぐらに複雑な道は・・・

リンが呆れながら口に言つ

「はあ・・・何よ!」・・・まるでダンジョンじゃない・・・

「ダンジョン・・・?あ!」

ミジコマルが何かを思い出したようだ

「どうしたの?」ミジコマル・・・

「ダンジョンって聞いて思い出したんだけどさ、こんな風に道が複雑な所を不思議のダンジョンって言つらしいの」

「不思議の・・・ダンジョン・・・?」

リンが不思議そうに聞き返す

「うふ、本とかに書いてあつたんだけど、不思議のダンジョンは、入るたびに地形が変わっちゃう所らしいの・・・」

「地形が変わる・・・?」

(地形が変わるなんて・・・そんな事あつえの・・・?)

「でも、なんでこんな所が・・・?」

「原因は星の温暖化、詳しい理由は分かつてないけど、そのせいで、このダンジョンが増えてるんじゃないかなって言われてるの・・・」

「星の温暖化って・・・どういふ事?」

「最近、この星の全土で気温が上がってきてるので」

「でも、じつはまだ不明みたいで、色々と調査してるんだ  
つて・・・」

「ふーん・・・」

(ダンジョンが増えてる事と星の温暖化・・・か・・・)

「取りあえず・・・早く探し出して、外に出ましよ」

「うふ

サツサツサツ・・・

じぱりくじて・・・

「さつさ、階段みたいなのを見つけたから、降りてみたけど・・・」

「まだ続いてるんだね・・・」

「はあ・・・何処に転がつていつたのや」

ため息混じりに囁つ

ザツ・・・

「え?」

ザツザツザツ・・・

足音が聞こえてくる

「足音・・・?」

「私たち以外に誰かここにいるの・・・?」

「もしかしたらね・・・」

ザツザツザツ・・・

足音が段々近づいてきた事に気がつく

「近づいてきてない・・・?」

「え・・・？」

リジューマルが耳を立てる

「ほ、本当だ・・・。」

「じ、じうかるの?」

「じうかるって言われても・・・。」

ザツザツザツ・・・

その間にじんじん足音は大きくなつてこく

「か、隠れる場所は!?」

辺つを見回す

身を隠せるほどの草もなく、逃げ込めるような道も足音が聞こえてくる方向にある道しかない

「こ、逃げ道なし・・・。」

「じ、じうかるの?」

「・・・。」

リンが身構える

それにつられ、リジューマルも身構える

ザツザツザツ・・・

足音の主が通路から出でてくる

ミーテリーだ

「な、なんだ・・・普通のポケモンじゃない・・・」

ミジコマルが身構えるのをやめる  
だが、リンは身構えるのを止めなかつた

「リン・・・どうかしたの?」

「なんか・・・あいつ、変な感じが・・・」

「変な感じ・・・?」

ミーテリーがリン達の方を向く

「ミジコマル! 気を付けた方がいいかも・・・!」

「え? 気をつけた方がいいって・・・」

「・・・・・、ミジコマル! 前!」

「へ?」

ミジコマルが前に振り返る

ミーテリーが走ってきている!

「え！？」

「まあい・・・！」

タツタツ！

リンがミジュマルに走り寄る

「うわっ！？」

ミジハマルをモードリーの直線上から離れさせると

リンクはすぐには三二テリ二の方へと目を向いた

「うん・・・ありがとう・・・」

「いいのよ、それよりあいつ、攻撃しようとしてきたよ・・・」

一  
うん

一なら、攻撃しても大丈夫よね。・・・！」

え！？まさか倒すつもり！？

「だって、そうしなきゃ、落ち着いてミジュマルの宝物を探せない

しね

「でもせ、リンってちやんと戦えるの・・・？」

「・・・」

リンがフリーズする

「あ、リンー？おーい！」

「だ、大丈夫よーきつヒーうんー！」

明らかに大丈夫のようには見えない

「無茶しないほつがいいよ・・・私に任せて・・・！」

「ミジュマルが・・・？」

「うんー任せてよー！」

ヨーテリーがようやく止まり、こちらを向く

ミジュマルに向かつて走つていぐ！

「よひ、とー！」

ヨーテリーの攻撃を横に避ける

「体当たり！」

攻撃で隙だらけのパークーリー＝ジュマルは体当たりをする。――

「ゾン・

パークーリーは前のめりに倒れる

「よつしー。」

「・・・・」

（暇だなあ・・・・）

ザツザツ・・・・

リンの後ろからひびき声が聞こえてくる

「一・?」

すぐさま、後ろを振り向く

後ろには、チヨロネコがいた

「わつ・。」

反射的に後ろに下がる

「リン・どうかしたのー・?」

ミジコマルがリンに声を掛ける

「他の奴が来ちゃったのー・・・・

「待つてて！こいつを倒して・・・」

「大丈夫！私が倒すから！」

「でも、リンは技の出し方分からないんでしょ！？」

「体当たりぐらいだつたら、出来るはずよ！」

「・・・わかった、気をつけてね・・・！」

「わかつてる！」

ザツ・・・

リンが戦闘態勢に入る

「さてと・・・さあ、どうからでも掛かってきなさい！」

タツタツタツ・・・

「ヨロネ」はリンに向かって走り出す！

「来たわね・・・！」

タツタツタツ・・・

「ヨロネ」は、リンとの間合いを詰めていく！

「・・・」

タン！

チョロネコが地面を蹴り、空中に浮く！

「上ー？」

チョロネコがリンに向かって飛び降りていく！

「やばっ・・・・・！」

チョロネコの攻撃を横に避ける

（ダメ・・・間に合わないー！）

ザシュー！

チョロネコの爪がリンの手をひつかく！

「うぐっ・・・・・！」

すぐにその場から離れる

チョロネコもリンから距離を取る

「いてー・・・・」

「やつたわね・・・・・！」

タツタツタツ・・・

リンがチョロネコに向かつて走る！

タツタツタツ・・・

チョロネコの目の前まで接近する！

「ひえ・・・」

ザツ！

リンがチョロネコの直線上から横にずれる！

チョロネコがリンの方を向く

「ここやるハー」

ドン！

チョロネコに全身でたいあたりする！

チョロネコが少しだけ吹っ飛ばされる  
が、すぐさま体制を立て直した

「よひしー！」

うまく攻撃が入った事に喜ぶ

タツ！

チョロネゴがリンに向かって走る！

ザツ・・・

リンが構える

タツタツタツ・・・

ザツ！

チョロネゴがリンの横に素早く移動する！

「横・・・・・？」

ザシユ！

「あああつー！」

リンの顔をチョロネゴの爪がひつかく！

「ぐつ・・・・」

「リンー！」

ミジコマルの声が聞こえてくる

ドン！

チョロネゴが何かに吹っ飛ばされる

「え・・・？」

チヨロネはそのまま床に倒れる

「大丈夫？ リン」

ミジュマルに声を掛けられる

「へ？ う、うん、大丈夫・・・」

「よかつた・・・リン。早く見つけて、帰りましょ」

「そ、そうね、また襲われたらやばいし・・・」

タツタツタツ・・・

「階段っぽい所を降りてきたけど・・・」

「なんか、ひらけた場所に出たね・・・」

先程までの複雑な通路とは違い、何もない所に出たようだ

「ここが一番下・・・って事かな？」

「多分ね・・・」

「あー。」

「どうしたの？」

「リン！見つけたよ！ほら、これ！」

ミジコマルが赤い宝石をリンに見せる

「わあ・・・綺麗ね・・・」

「これ、この前、草原で拾つた物なの！」

(草原で見つけたって・・・大丈夫なの・・・?)

ザア・・・

(・・・え?)

ザアア・・・

(な、なにこれ・・・)

(め、めまい・・・?にしては、なんか変な感じが・・・)

汝・・・草蛇の皮を被る者なり・・・

汝・・・人の心持ちし者なり・・・

(な、なんなの・・・この声・・・幻聴・・・?)

「リン・・・？お~い！」

「へ？あ、何！？」

「い、いや、なんでもないよ・・・ちょっと~~お~~ページにしてただけ・・・

・

「ふう～ん・・・」

「それより、戻りましょ

「そうね・・・」

ザツザツザツ・・・

## 第2話 ダンジョンへ（後書き）

はい、第2話 完 です

次回もゆっくり急いで行ってね！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7159x/>

---

ポケモン不思議のダンジョン 理想の搜索隊

2011年11月30日16時46分発行